公開講演会記録

アメリカ・地球、住んで旅して騙されて
――異文化理解と多文化共生

定年生活アドヴァイザー／地球漫歩自悠人　小川律昭
教育学博士／エッセイスト　小川彩子

「変化こそ人生、体験こそ財産なり」と好奇心のまま動き回った119か国。結婚50周年記念には50か国訪問の旅、40周年記念、25周年記念には夫婦別々に旅をし、デートは地球の反対側でしてきた変わった夫婦の奇妙な人生をほんの一部紹介する。

Ⅰ、超内気な主婦が自己変革
――内なる挑戦から外への挑戦へ

泣き笑い挑戦人生

エッセイストの彩子はグローバル・平和教育学者。52歳の時夫の転勤に伴って渡米。着いた翌日大学院の門を叩き55歳で修士号を取得した。58歳で博士課程に進み、還暦を迎えた年に博士号を取得、還暦祝賀パーティーで母・八重子から届けられたメッセージ「静かな泉の水は涸(か)れる」――精進し続けよ――という意のその言葉は今も胸に響き、「物事を始めるのに年齢は無関係」や「目標を持つことの重要さ」などのメッセージを発し続けている。

日本での学生時代はおとなしく、自己主張をすることができず教室で目立つことはなかった。人生の転機は30歳のとき。自分とは正反対で自己主張が強い夫・律昭の影響で「自己変革」を遂げた。「毒舌夫に泣かされ続けてたまるか」と自らを「頑固妻」と呼び、婦人運動や塾経営、更に1人旅など次々に活動の場を広げ、次第に意見表明の方法を身に付けていった。1990年、52歳での渡米時、機中で、「大学院で学び、自分も教壇に立つ」「日本文化を発信する」「日英両語で本を出版する」と、3つの目標を立て、「自分の人生は自分でデザイン」と迷わず大学院の門を叩いたが、肝心の学業は苦闘の連続だった。シンシナティ大学工学部入学当初実験が多く、老眼で目盛りが読めず、プライドが傷つけられる日々。路

線変更を決めザビエル大学教育学部に転学転部。その軌道修正が吉と出た。渡米後、飛行機の中で立てた目標の１つ、「アメリカ文化を発信する」の通り同大学に日本語学科を設置するよう働きかけ成功、自らが初代教師として日本語・日本文化を教えることになった。苦あり楽ありの人生を「泣き笑い挑戦人生」と呼んだが、教壇に立つようになりようやく「笑い」の部分が多くなった。その後著書６冊目となる『Across the Milky Way：流るる月も心して』を出版、世界を旅する主人公が各地で人の温かさに触れるという物語で多文化共生が大きなテーマ、英文・和文併記ゆえ英語の教材にもなる。この出版であの日、飛行機の中で立てた目標は全て達成したことになる。

Ⅱ、足と心で異文化交流
――人間遺産と触れ合う旅

アルメニアで出会いジョージアで別れイランで再会、大歓待の日々　～イラン・イスラム共和国～

出発前世界の諸々で爆破があり心の準備をして出かけた。旅行者もイスラムの戒律に従わねばならず筆者もベールで身体中隠す服装で。アミールが空港に来ていて驚いた。アミールとは５年前アルメニアの長距離バス乗り場で会い、ジョージアへの国境越えバス車中で親しくなり、到着したトビリシで一緒にホテルを探し、ネストという民宿で２泊しただけの関係だ。我々が先に宿を発つことになり、彼が不在だったので彼に簡単な弁当と手紙を残した。その後たいしたやり取りもなく、今回「イランに行くよ！」と連絡したらなんと彼の住むハマダンからテヘランへ３５０キロ運転して迎えに来てくれ、往復７００キロ、７時間以上運転して自宅へ。「My home is your home! 泊ってくれればとても幸せ！」と言い張った。アミールの両親一族や夫人マシードの両親一族の歓迎饗宴続き。特筆すべきはマシードの妹、マヌーシュの大学の１講座でスピーチを頼まれたこと。多文化共生について１時間、教官も学生も真剣に聞いてくれた。過去約１１９か国訪問で親切には色々あったがこんな親切漬けは初めて。なぜ?と問うたら１枚の紙を見せ、「アルメニアで貴女が残した手紙覚えていますか？」「いいえ」「これです。なくさないようコピーも取って眺めてきました」。私の筆跡だった。「会えて嬉しかった！どうぞ東京へ来て私宅に泊まってください」という簡単なもの。彼曰く、「ご夫妻の温かさを感じ、日本人を大好きになりました」と。３日目の深夜、抱え切れぬほどのお土産を頂き、イスファハンに向かう長距離バス停で見送られた。マシード姉妹は涙、涙で別れを惜しんでくれ、後ろ髪で眠れぬ夜行バスだった。人の縁は妙なり、と地球の一角での「一期一会」を楽しんでいる筆者夫婦である。（彩子）

アミール一家による晩餐

一か八か切符を買い、問題抱えて入国挑戦！　～アメリカ合衆国～

入国の可能性50％の渡米切符を「エイヤッ」と買い、シアトル空港から成田への逆戻り覚悟でアメリカへ。アメリカはイラン人を拒否するだけではなく、過去にイランに行った日本人も入国拒否してきたのだが、我々夫婦は昨年８月にイランに行っていた。アメリカ大使館に聞いても「アメリカの空港に行ってみないと判りません。入国審査官が決めるのです」とだけ。一か八か切符を買って出かけるしかなかった！　抱えていた問題はこのイラン訪問だけではなく筆者の健康問題。大動脈瘤で２月に３つのステントグラフト挿入手術を受け、やっと普通に歩けるようになった状態だった。さて結果はいかに？　入国審査が自動化され今まで審査官を前にやってきた入国手続きを機械相手に自分で行い、出てきたチケットを係官に渡すだけだった！　ニューヨーク空港では２０１５年に経験したが、シアトルもそうなっていたのだ。だが、別の問題が！　帰りの飛行機で通路にぶっ倒れたのだ。

（律昭）

日本贔屓の女性詩人 Jeannine とチューリップ・フィールドにて

警察署でインテグリティー説教　～ドミニカ共和国～

カリブ海に浮かぶイスパニョーラ島のドミニカ共和国はコロンブスが第一歩を印した地、海外協力隊のお陰か日本人は入国税10ドルが不要だ。プンタカーナ近くのリゾート、ババローで淡碧色のカリブ海を満喫したあと、カリブ諸国中の最大都市、サント・ドミンゴにやって来た。コロンブスの子孫が三代にわたって住んだ建物、アルカサールを見て他の見所は観光バスで回ろうとホテルで予約した。やってきた男は自称マイク、「観光バスと同じ費用で見どころ15か所をタクシーで巡ってあげる」と、観光地の写真を見せ喋りまくった。この地でよく見かけるイモリにそっくり、と言ったらイモリに失礼だろうか。車に乗ったら「あれは別予算、これも別」と約束を守らず領収書もなし。「よし、時間があったら教育してやろう」と教師の血が騒いだがその時は胸に収めた。トレス・オホスという湖は洞窟の長い階段を降りると現われる翡翠色で引き込まれそうに美しい底なしの湖。インディヘナの神聖な場所だったがインディヘナはスペインの征服者に皆殺しにされたという悲しい歴史を持つ神秘な湖を見てマイクの車を降り、プエルト・プラタの白い砂浜や要塞、ボカ・チカの遠浅の海岸で純情な人々との交流を楽しみ、５日後サント・ドミンゴに戻って来た。

旧市街にある小さい警察署に立ち寄った。若い柔和な警察官が好感を持って聞いてくれ、10分後「その男が警察署に来ています」と。署員が気を利かして呼んだらしい。事件後５日も過ぎていて何事かと不安になったのかマイクは子分を連れており、紙幣をちらつかせ、言い訳を準備していた。曰く、「あの日はコンヒューズ（混乱）していた。いくらお返

しすればいいですか？」「領収書はすぐ書きます」。子分らしき男も「コンヒューズ、コンヒューズ」と口真似した。警察署の入り口に人だかりができ始めた。制服警察官、日本人の女とその夫、公園周辺で顔を利かすイモリ達、という顔ぶれが立っているのだから通行人の興味を惹いたのだ。筆者の出番だった。「そんなお金が欲しくて旅の道中、貴重な時間を割いて警察署に立ち寄ったのではない。嘘つきは嫌いだ。車に乗る前の説明と実際とが異なるのが問題だから来たのだ。私は大学で多文化教育を教えているがIntegrity の重要性について話すことが多い。インテグリティーとは信用、即ち言行一致だ。私たちがドミニカ共和国で会った人たちは皆さん素敵だった。マイクを除いて！」とイモリ君を指差した。拍手が起こり、警察官やイモリの子分まで笑った。“Except for Mike!”（「マイク以外は」皆さん素敵）が受けたのだ。指を差されたマイクまで苦笑し、やがて警察署員が「ご来署有難う！」と。小さな事件を知らせに立ち寄ったことも警察署門前の説教も喜んでくれたのだ。警察署を出るとすぐマイクは先ほどちらつかせたお金は引っ込め、「コーヒーは好きですか」と聞き、ドミニカ・コーヒーを買ってきて手渡し、子分と一緒に消えた。日本に戻り、筆者は「お喋りイモリ君」を思い出しながら今香りの良いコーヒーを飲んでいる。（彩子）

iPad が縁で友達となり家まで招かれた姉妹と（オマーンにて）

鶴竜のお父さんに会えた！――父君は学部長（当時）で思慮深き教育者　～モンゴル国Ⅰ～

筆者は相撲ファン。相撲は裸一貫、丸腰で戦い、技能、頭脳、努力、忍耐力が物を言うスポーツで体躯の小さい力士が巨漢を転がすことも大きな魅力だ。横綱の鶴竜は小柄だが努力家、常に冷静で頭脳的な相撲が多い。どんな家庭教育をされたのか父君に会ってみたいと思っていた。ブルガリアでは琴欧洲のお父さんに会って記事にしたので「こんどは鶴竜だ！」と。彼の父上、チメド・マンガラジャラブさんは国立大学の教官と知っていたが面会予約もできずに出かけ、入国してからもチンギスハンゆかりの遺跡など、広大な草原の探訪が先になり、ついに滞在最後の日となった。キャンパスの一角にモンゴル・日本センターという建物があり飛び込むと、図書館で働くアザーさんが、彼はモンゴル国立科学技術大学の学部長だと調べてくれ、「行って見ましょう！」と。7月1日のその日はコメンスメント、角帽とガウンの学生や家族で溢れていた。学部長は祝福の辞を述べねばならないので学部長室には不在。が、アザーさんの努力と筆者の粘りで2回の式典の合い間に会って頂けた。持参していた筆者の鶴竜記事と「鶴竜のファン」がもたらした好運だったろう。

筆者は鶴竜をどうのように育てられたかを伺った。①個性を育てる教育です。

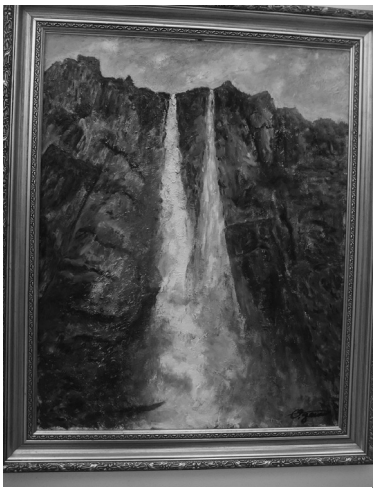
アナンダ（鶴竜の愛称）の興味を聞き、彼の好きなことを重視し、それを育てるよう一緒に考えました。アナンダは初めアメリカ留学の夢を抱いていましたが後に相撲が好きになり、彼の目標について親も一緒に考え目標必達を教えました。②嘘をつかず正直に生きて行くよう教えました。失敗しても親に相談し、失敗の原因を究明し、一緒に考えて解決してきました。③モンゴルの秘史を5回読んでもらい男子の生き方を学ばせました。男子は常に「強くあれ、勇気を持ち、目的に向かって努力せよ」と。TV画面の優しい鶴竜から父の教訓が伝わってくる。愛情に満ちた教育者の父君に面会し、昇る鶴竜が一層好きになった。（彩子）

ウギー湖畔で突然の歓迎――釣れたての淡水魚と馬乳のご馳走　～モンゴル国Ⅱ～

かつてのモンゴル帝国の首都でカラコルムと呼ばれたハラホリンの世界遺産エルデニ・ゾーへとランドクルーザーを調達、緑の牧草地を800キロ。道なき道で馬、牛、山羊に進行を妨げられつつ13時間前後左右上下に身体を揺すられる行程は腰痛と癌持ちの夫婦には酷だったが、通りかかったウギー湖で疲労が霧消した。湖畔でピクニックをしていた親子が「息子が英語を話します。一緒に食べましょう！」とご招待。ムンク君は国際高校の生徒、礼儀正しく英語は流調で会話力に富んだ。何とウギー湖で釣ったばかりの魚をすぐ調理し、搾りたての馬乳と共におもてなし。初体験の馬乳は酸味がありこれも美味だった。「世界遺産より人間遺産！」という我ら夫婦の信条通りモンゴルは出会い中心の旅となったが、濃密な家庭教育と大変家族の絆が強いことを実感した。2組の麗しい親子に馬乳で乾杯！（彩子）

入歯も泳いだエンジェル・フォール

ベネズエラのギアナ高地にある落差世界一（980m）のエンジェル・フォールはそこに至る行程が未開発である上ジャングルに囲まれているので基地であるカナイマまでセスナ機で行った。ボートでオリノコ河から上流へ遡上、ジャングルを歩きまた川を遡上して支流のカラオ川へ。瀬音も賑やかに響く。急流に変わったチュラン川を遡行すること1時間、湿地ジャングルの木の根と岩の間の密林を登ること1時間、汗だくでようやく滝の上部全貌を見上げる岩場へ、近づく滝の音に勇気付けられ、ヨイショ、ヨイショのかけ声で。


エンジェル・フォール

なるほど素晴らしい光景だ。雄大な大自然の神秘が目の前に！　岸壁を伝わる2筋の水の束は霊感を呼び荘厳そのもので世界からの観光客を感嘆させている。滝を見上げた岩場から下って滝壺に到着。周辺は水の飛沫が気化して靄（もや）っており水面は柿の渋を流したように光沢のある黒色、複雑な水流で盛り上がっている。若者に混じってエンジェルの滝の滝壺で泳ぎ始めた。70代は筆者1人だったろう。そのうち流れ急な落下点付近でなんと入歯が勝手に泳ぎ出したではないか。パニック状態で追いかけ取り押さえるのに必死となり見えなくなる寸前にやっと捕えることができてホッと一息。歳なりのものの考え方をしないととんだ目に遭うと痛感した。だが滝壺で泳いだことはわが生涯の記念である。（律昭）

キューバ：キューバでできた友だち、シナーイに筆者が癌を告げたら、「キューバの医療は高レベルです。ぜひキューバに来て治療して！」と、涙が出そうなご招待を頂いた。（彩子）

キューバの首都ハバナで、民宿の家族と

ウルムチはスマホ片手のおしゃれカップル花盛り！　～中国～

人口２５０万人の街ウルムチは緑の街路樹に覆われた近代都市だ。至る所に交番を兼ねた検問所が必ずあり、身分証明書（外国人はパスポート）を要求される。公共の建物は皆チェック体制があり手荷物検査、大きいバス停も降り口で検問だ。団体観光バスも外国人は入口でパスポートの点検と記録があり列を作って待たされる。深夜も主要道路はパトカーがパトロールしているのがホテルの窓から目に付くが、世界でも見かけなかった光景で、とにかく街中が警官だらけだ。ウルムチ（烏魯木斉）市からトルファン（吐魯番）市へ。宿泊した有名ホテルでもレセプションで英語は通じず困っていると、ホテルの女性社長がスマホを見せ、英文で「西遊記に登場する火焔山周辺と世界遺産の交河故城（シルクロードの一部）を見るべきです」と、「1人１５０元、４人組で１日観光」を提案し、若い仲間とトルファンを見学できた。入園料全てをまとめて若者がスマホで支払った。スマホがあれば試算、精算が即座にできる。通訳の機能もあるのでスマホさえあれば通訳不要だ。乗合いバスの中で停留場を質問した女性のスマホに英文で答えが明示された。誰も英語を話さないが皆がスマホを持ち、尋ねたことを推察して現地語で解釈、答えは英文に仕上げて「これ」と言ってスマホの画面を見せてくれるのだ。「利便性の中国なり！」と実感した。（律昭）

結婚50周年記念50か国訪問地球千鳥足Project：地球上の人の縁を追い求めて

かつて旅した数十年前と現在との国情並びに庶民の暮らしの変化を地球人として知る旅。還暦前から約20年、異文化での生活を体験して大いに刺激を受けた我々夫婦だが、咄嗟の出来事には瞬時の判断・決断をすることで、旅も精神や脳の活性化を喚起し、予防医学に役立つと思っている。縁あって苦楽を共にした1夫婦が結婚50周年（78歳、72歳）の記念に50か国を経巡る地球バック・パックの旅の意味を同世代や後進若者と分かち合いたい。

期間　２０１１年。11月までに3～6か月（2回に分けてもよい）予算　１０００万円

旅のデザイン案　地球6大州の突端を巡る旅、タスマニア、カニャークマリ、ケープタウン、ウシュアイア、アイスランド、パナマ　関心都市は初訪、再訪含み、ハバナ、ボゴタ、マナウス、リオデジャネイロ、カサブランカ、トリポリ、サンクトペテルブルグ、キエフ、テヘラン、ボンベイ、カルカッタ、ビエンチャン、ポートモレスビー、メルボルン、など50か国。

毒舌夫と頑固妻、ワンワールドの旅へいざ出発　～ポルトガル～

我ら夫婦は本年11月結婚50周年を迎える。幼少時から一言居士のあだ名で育った毒舌夫と、妥協が嫌いな頑固妻が、喧嘩しながらも迎えた50周年を記念し、11月までに50か国訪問しようではないか、と。過去、記念の年ごとに特別の旅を企画してきた我ら夫婦だ。結婚25周年には「カサブランカで会いましょう！」と同時に家を出て夫は北周り、妻は南回り、1つの国を隈なく見てからモロッコへ向かうというルールだった。夫はオランダ、妻はパキスタンを選び、25年前のことゆえ地を這うような旅だったが無事カサブランカで会えてグラスでカッチンした。結婚40周年にはこれまた地球の反対側、サンチャゴで会いましょうと、夫はアメリカから妻は日本から出発、待ち合わせ場所のサンチャゴ空港で会えず、すれ違いを繰り返した後会えたのだった。今回の50周年では、お互いを心配し合うより一緒に50か国経巡ろうと決めた次第だ。良い年の夫婦ゆえ、ワンワールドはビジネスクラス、シンシナティのＪＴＢで切符だけで３７０万円だった。この50周年の旅企画には50か国という数字だけでなく、夫は６大陸の最南端（国が海に面していればその国の最南端も）を訪問する、妻は訪問国ごとに最低20人へアンケートをしつつ歩く、という計画。アンケートのテーマはIntegrity（信用度・信頼性）、わが人生最後のリサーチをして学会に発表するという野望を持った。

なぜIntegrityか。ご存知だろうか。世界を歩いて感じることだが日本人は概ね／大変好感を持たれているがそれは言行一致、信用度が高い、ということに起因している。リスボンに着き、まずは夫の希望、ユーラシア大陸最西南端の街サグレスを目指した。英国航空のニックが「日本と日本人大好き」と降りる時スコッチ７本、シャンパン４本もくれたので列車の中で隣席の人々と乾杯しアンケートに答えてもらった。

（律昭）

出会いと再会、多文化共生の小川地球村塾よりハロー、ニーハオ、コモエスタ？

この塾は年２回、異文化を学び多文化共生のヒントを求める、「異文化理解と多文化共生」パーティーだ。「たった一つの丸い船を分かち合う地球村民の集い」と歌うこの塾は、村人が共有する知恵を基盤に人種や民族を超越して平和的に共生する術を楽しく学び合うという目的を持つ昼食会だ。この集会には５つのプレゼンテーションがある。①多文化共生の学習。②多文化アート紹介。③多文化音楽＝種々の楽器の演奏や合唱。④多文化ドリンクス及び多文化食で会食。⑤地球千鳥足の旅の写真を纏めたPower Pointで多文化映画を観てのち交流会＝ここで若者やシニアの縦の交流、異文化背景の人々との交流ができる。出会い、再会、多文化共生、平和希求のこの会は「みんなが主役」、友は、人の縁は宝なり。

（彩子）

Ⅲ、異文化理解と多文化共生の教育

多文化共生とは文字通り多文化背景の人々が共に生きることであるが、そのためには「異文化への鋭い感受性とグローバル意識を育み、異文化背景の人々と隣あって住み協働し、自グループの立脚点からのみでなく他グループの立脚点から物事を見たり思考することができ、説得力を持って対話や意見表明し、地球的視野で正義や平等の実現に向けて努力する態度を育くむ」ことにより実現する。それには多文化教育、グローバル教育が必須である。文化の摩擦や衝突で生じる火花が炎上して当事者同志を断絶させることを防ぐにはまず異文化理解と多文化共生の教育が

必要だ。文化の衝突で生じた火花を、危険な炎ではなく美しい花火に昇華させるために教育の役割は甚大である。（彩子）

Ⅳ、自己実現と共生活動の交点

自己実現（Achievement）のみでなく、他の人／他グループのための活動のある人生は素晴らしい。（彩子）

ジョージタウン（ガイアナ）の高校生たちと

Ⅴ、挑戦に適齢期なし！

「年だ」は「ま～だ」だよ。何をするにも遅すぎることはない。（彩子）

（２０１８年７月９日・公開フォーラム）

筆者略歴

（おがわ　ただあき）

鳥取県出身。定年生活アドヴァイザー。（株）スリーボンドにてケミカル・エンジニアや役員等、社歴40年。「変化こそ人生」をモットーとし、「加齢と老化は別」を信条とし、好奇心を武器に世界を駆け巡る地球漫歩自悠人。在米20年、油絵、随筆の日々を楽しみ、旅に関する講演多数。夫婦別々または一緒に地球を経巡り、踏破した国は１１９か国。在米日本人が読む新聞J-Angleに夫婦で「地球千鳥足」を書いて11年。

（おがわ　あやこ）

鳥取県出身。州立シンシナティ大学にて教育学博士。多文化・グローバル・平和教育者。エッセイスト。夫の転勤を機に52歳でアメリカの大学院入学、博士号へと続く道は泣き笑い挑戦人生。その後准教授となりＵＣＢＡなどで教壇に立つ。「挑戦に適齢期なし」を信念とし、学会発表、講演、地球探訪を重ねる。人生は一度きり、騙され眠り薬を飲まされてもなお人間と地球への愛は失せず。

主な著書　２０１７年『地球千鳥足～バックパッカー夫婦の人間遺産と触れ合う旅～』彩子・律昭共著（幻冬舎）。２００４年『デートは地球の裏側で！：夫婦で創る異文化の旅』律昭・彩子共著（春陽堂）。２００３年『還暦からのニッポン脱出』（文芸社）。２０００年『突然炎のごとく』彩子（春陽堂）。１９８４年『Still Waters Run Deep Part Ⅱ：音なし川は水深し』（英文和文随想集）（梨の木舎）。１９８２年『Still Waters Run Deep Part Ⅰ：音なし川は水深し』（英文和文随想集）（梨の木舎）など。